

# 2007年度 大学入試を振り返る

大学全入時代の到来と言われた2007年度入試が終わった。18歳人口の減少にもかかわらずセンター試験志願者数は4年ぶりに増加したが、国公立大志願者数は減少。センター試験平均点の低下が影響して昨年までの難関大志向から一転、安全志向の強く現れた入試となった。一方、私立大では国公立大志願者が流入して4年ぶりに志願者が増加した。しかし、増加は一部の難関大、都市圏大に集中、それ以外の大学は減少傾向が続き、2極化は拡大している。

この度、河合塾が各大学に行った入試結果集計調査により「受験者数」「合格者数」のデータ集計もほぼ終え、また全国の高校の先生方のご協力により約153万件の入試結果調査（可否）データを集めることができた。それらの集計結果を踏まえ、2007年度の一般入試について総括したい。

## 国公立大学編

国公立大の志願者数については既に2月時点で判明しており、本誌4・5月号で個々の大学についての分析を行ってレポートした。本号では2007年度入試のポイントを大きく総括するとともに、各大学の難度の変化や今年度の動向を踏まえて来春入試を展望していく。

### 大学入試センター試験志願者数は4年ぶりに増加 平均点は5-6型で39点ダウン

はじめに大学入試センター試験（以下、センター試験）の状況を簡単に振り返っておく。志願者数は553,352人で、前年に比べ約2千人（100.4%）増加し、2004年度以降続いていた減少に歯止めがかかった。現役生志願者は約8千人増加しており、現役生に占めるセンター試験志願者の割合は過去最高の37.7%となった。

平均点は、文・理共通の5教科6科目型が501点（河合塾推定）で昨年より39点ダウン。文理別に見ても、5教科7科目理系型が564点（前年差-48点）、6教科7科目文系型が557点（同-32点）と、いずれも低下している。数字の上では大幅なダウンとなったが、これは2006年度の平均点が非常に高かったことによるもので、センター試験としては標準的な点数に落ち着いたといえる。いずれにせよ平均点が大きく変動しているため、昨今の実態ボーダーの変動を見る際にはこのことを念頭に置く必要がある。

### 各日程で志願者数が減少 倍率は3.95倍に

次に国公立大の志願者数・合格者数の状況について確認しておく。

《表1》にあるように国公立大志願者の総数は488,524人で、昨年より約1万7千人の減少となった。前・中・後期の各日程とも志願者を減らしている。

合格者数は前期日程で90,270人から91,069人（前年比100.9%）と微増し、志願者の減少が大きかったことから、倍率は2.85→2.78と0.07ポイント下がった。後期日程では29,241人から27,825人（同95.2%）に減少したが、志願者も減少して

いるため倍率は7.62→7.56と0.06ポイント下がった。国公立大全体の倍率は3.95となり、1992年の3.78倍以来15年ぶりに4倍を割り込んだ。

地区別にみると、北海道地区でわずかに前年を上回っている以外は全国で志願者が減少している。なかでも関東・甲信越地区の中期日程、近畿地区の後期日程で志願者減少が目立つ。近畿地区の後期日程は前年比85.9%で、京都大（-4,847人）の後期日程廃止、京都工芸繊維大（-806人）の後期募集人員削減の影響が大きかったようだ。関東・甲信越地区では昨年志願者を増やした反動から都留文科大（-1,565人）で大幅な減少となっている。

### センター試験平均点ダウンが影響 難関大を敬遠する動きも

センター試験の志願者数が約2千人増加したにもかかわらず、国公立大の志願者は減少した。これには、センター試験平均点の大幅ダウンが大きく影響していると考えられる。センター試験で思うように得点できなかったことによる不安から、受験生はより安全志向に動いたようだ。

《表2》は国公立大の入試結果を入試難度別に集計したものである。ボーダー得点率65%未満の大学で志願者が増加しているほかは、中位大を中心に全ての区分で減少している。昨年までは高い人気を保っていた難関大でも志願者の減少が目立つ。ボーダー得点率80%以上の前期日程では倍率もはつきり下がっており、少なからず間口は広がったと言えるだろう。

ただし、難関大では志願者の減少に反して難度がアップしているところも少なくない。東京工業大（第2類）は、志願者は前年を下回ったが、受験者の成績分布《表3》をみると、昨年よりも全体的に成績の高い側にシフトしていることがわかる。昨年の合格者のボリュームゾーンが、今年データでは不合格者のボリュームゾーンと一致しており、難易ランクも1ランクアップした。このようなケースでは志願者の減少分はチャレンジをあきらめた成績下位層であり、上位層はしっかり受験してきている様子がわかる。

志願者を増やしているボーダー得点率60%未満の大学につ

いては、前期日程の合格者数も増加していることに注目したい。募集人員は2,475人→2,410人と65人減少しているが、その一方で合格者数は3,206人→3,361人と155人増加した。中位～下位大では、併願先の私立大に合格し、最終的に国公立大から離脱していった受験生も相当数いたようだ。結果、こうした大学では志願者数が増えているわりには入試難度が上がらなかつたところも多い。

センター試験平均点の低下による心理的不安から今春入試では難関大を敬遠する動きが見られたが、後述する私立大の志願状況からも基本的には難関大志向は変わっていないといっていだろう。志願者が減少した年の翌年は反動で志願者が増加する傾向もあり、今春不人気だった難関国公立大も来年度は再び高い人気となることが予想される。志望者は状況をよくふまえておくことが必要だ。

### 後期日程廃止で難度にも変化が 周辺大の動きにも注目

2006年度の筑波大、岡山大に続き、2007年度も多くの大学・学部で後期日程が廃止された。後期日程廃止による入試状況の変化についてみていこう。

〈グラフ4〉は二次ボーダー偏差値別にランクのアップダウン状況を前・後期それぞれでまとめたものである。後期日程廃止にともない募集人員が増加した前期日程でランクダウン、後期日程でランクアップしている様子が顕著である。

東北大では前期募集人員の増加分とはほぼ同程度志願者も増えたが、名古屋大、京都大では増加分ほどは増えておらず、志願倍率が低下している。京都大では農・資源生物科学、総合人間（理系）などでランクダウンがみられ、基本的には募集人員の増加で間口は広がったと見ていいだろう。

一方、狙い目感からか志願者数が大きく増加した大学もある。新潟大（医-医）の前期日程は募集人員10名増となり、志願者もこれに伴い285人から386人へ増加。2次のボーダーランクは1ランクアップした。

周辺大の同系統学部の後期日程では志願者の増加がみられる。京都大の後期日程廃止の影響が予想された大阪大では大学全体で志願者数が約1割増加。特に理学部は前年比144.1%、工学部は同121.8%と大幅な増加となった。工学部では応用自然科学、応用理工、地球総合工学科でランクアップしている。また、京都大、大阪大からの志望変更先として影響が見込まれた神戸大では、後期日程志願者は前年比97.5%と微減し、予想された量的増加はみられなかった。しかし、志願者の増加した理-化学や経営（数学科）だけでなく、志願者が減少した文、経済、医-医なども含む複数の学部・学科でランクアップしており、質的には成績上位層がしっかり集まったようだ。名古屋大（工）の主な併願先である名古屋工業大の後期志願者は前年比103.0%で、数字上目立った増加はみられなかったが、併願の内訳には変化が現れている。河合塾が行った入試結果調査データによると、昨年は後期で名古屋工業大を受験した生徒の前期出願校は名古屋工業大（237

〈表1〉国公立大 入試日程別入試結果

区分	日程	募集人員		志願者数 (A)			合格者数 (B)		倍率 (A/B)	
		2006年度	2007年度	2006年度	2007年度	前年比	2006年度	2007年度	06年度	07年度
区 分	国立	82,498	81,887	382,262	368,968	96.5%	97,049	95,738	3.94	3.85
	公立	18,541	18,865	123,111	119,556	97.1%	27,390	28,001	4.49	4.27
日 程	前期	75,862	77,021	257,431	253,176	98.3%	90,270	91,069	2.85	2.78
	後期	23,178	21,743	222,825	210,308	94.4%	29,241	27,825	7.62	7.56
	中期	1,999	1,988	25,117	25,040	99.7%	4,928	4,845	5.10	5.17
全 体		101,039	100,752	505,373	488,524	96.7%	124,439	123,739	4.06	3.95

※5月22日現在河合塾集計で、別日程で入試を行っている大学は含まない

〈表2〉国公立大 入試難度別志願状況

ボーダー 得点率	日程	募集人員		志願者数 (A)			合格者数 (B)		倍率 (A/B)	
		06年度	07年度	06年度	07年度	前年比	06年度	07年度	06年度	07年度
90.0%以上	前	5,318	5,340	22,704	22,190	97.7%	5,419	5,453	4.19	4.07
	後	1,058	907	15,717	14,205	90.4%	1,171	1,004	13.42	14.15
85.0~89.9	前	5,936	6,211	27,133	25,845	95.3%	6,576	6,818	4.13	3.79
	後	2,528	2,048	28,330	22,949	81.0%	2,919	2,353	9.71	9.75
80.0~84.9	前	13,565	14,022	46,271	45,123	97.5%	15,509	16,091	2.98	2.80
	後	4,165	3,969	39,974	36,806	92.1%	5,132	4,792	7.79	7.68
75.0~79.9	前	13,986	13,968	45,579	43,417	95.3%	16,668	16,623	2.73	2.61
	後	4,477	4,273	39,009	34,681	88.9%	5,734	5,498	6.80	6.31
70.0~74.9	前	14,575	14,566	48,439	45,696	94.3%	17,869	17,572	2.71	2.60
	後	5,385	5,072	46,194	43,493	94.2%	7,028	6,765	6.57	6.43
65.0~69.9	前	12,854	12,910	39,130	38,950	99.5%	16,131	15,818	2.43	2.46
	後	3,077	3,006	28,422	27,400	96.4%	4,036	3,977	7.04	6.89
60.0~64.9	前	6,707	6,622	20,134	20,866	103.6%	8,434	8,243	2.39	2.53
	後	1,194	1,109	8,531	11,152	130.7%	1,594	1,625	5.35	6.86
55.0~59.9	前	2,093	2,043	5,733	6,446	112.4%	2,733	2,858	2.10	2.26
	後	526	457	6,360	7,176	112.8%	675	652	9.42	11.01
55.0%未満	前	382	367	804	1,136	141.3%	473	503	1.70	2.26
	後	292	297	2,270	3,285	144.7%	459	430	4.95	7.64
ボーダー無し	前	446	972	1,504	3,507	233.2%	458	1,090	3.28	3.22
	後	476	605	8,018	9,161	114.3%	493	729	16.26	12.57

※集計の難度は前年度（06年度）の実態ボーダーを使用

※「ボーダー無し」の大学は新設学部・学科、新規日程、第1段階選抜のみにセンターを利用する大学など

〈表3〉東京工業大（第2類前期）の合否分布

年度	合否	42.5 未満	42.5~ 44.9	45.0~ 47.4	47.5~ 49.9	50.0~ 52.4	52.5~ 54.9	55.0~ 57.4	57.5~ 59.9	60.0~ 62.4	62.5~ 64.9	65.0~ 67.4	67.5~ 69.9	70.0~ 72.4	72.5 以上	全体 人数	平均 偏差値
07年度	合格				1			2	5	4	11	13	3	1	1	41	63.7
	不合格	1	1	1		6	8	11	12	16	7	3	1			67	57.9
06年度	合格						3	2	8	13	6	8		1	1	42	61.9
	不合格		1		4	6	12	14	12	9	6	1				65	56.6

※上表は当該大受験者による全統記述模試の偏差値分布（河合塾入試結果調査データより）

名)、名古屋大(190名)であったが、今春入試では1位名古屋大(240名)、2位名古屋工業大(195名)となり、順序が逆転した。

また、**岐阜大(医-医)**の後期は募集定員を10人→35人に大幅に増やし、二次試験を小論文・面接から学科試験に変更したことで、前年比1232.1%と非常に多くの志願者を集めた。医学科受験生は地区を越えた受験をする傾向が強いため、他地区の大学の後期日程廃止により行き場を失った受験生が殺到したようだ。

同じ大学内で後期日程を行っている学部に出願するという流れもみられた。情報文化、工学部で後期日程を廃止した**名古屋大**では、後期日程を続けた理学部の志願者が389人→505人(前年比129.8%)と大きく増加している。また、工、農、歯、医-医で後期日程を廃止した**東北大**でも、同様に後期日程を継続した理学部で416人→848人(前年比203.8%)と志願者が倍増した。

2008年度入試においても、後期日程廃止の動きは拡大する。**表5**は現在判明している後期日程廃止大学(学部・学科)の一覧である。2007年度入試において複数学部で後期日程を廃止した**東北大**、**名古屋大**では廃止学部を拡大する。**東北大**では教育・法・薬・医(保健)学部で後期日程を廃止し、後期日程が残るのは文・経済・理学部のみになる。**名古屋大**は文・理・医・農学部で後期日程を廃止し、全学部で後期日程廃止となる。

また、医学科でも後期廃止が目立つ。**東京大(理科三類)**、**神戸大**、**徳島大**、**高知大**、**京都府立医科大**で後期日程が廃止される。なお、**東京大**では理科三類以外の科類は継続して後期日程を実施するものの、募集は全科類一括での募集とし、募集人員も100人(2007年度:324人)と大幅に縮小される。

前述のとおり、前期日程一本化の影響は併願先の大学の志願状況にはっきりと現れている。2008年度に後期日程廃止が予定されている大学でも、同様に周辺の大学では注意が必要となるだろう。

### 「社会・国際」系が人気 教育学部は大幅な志願者減

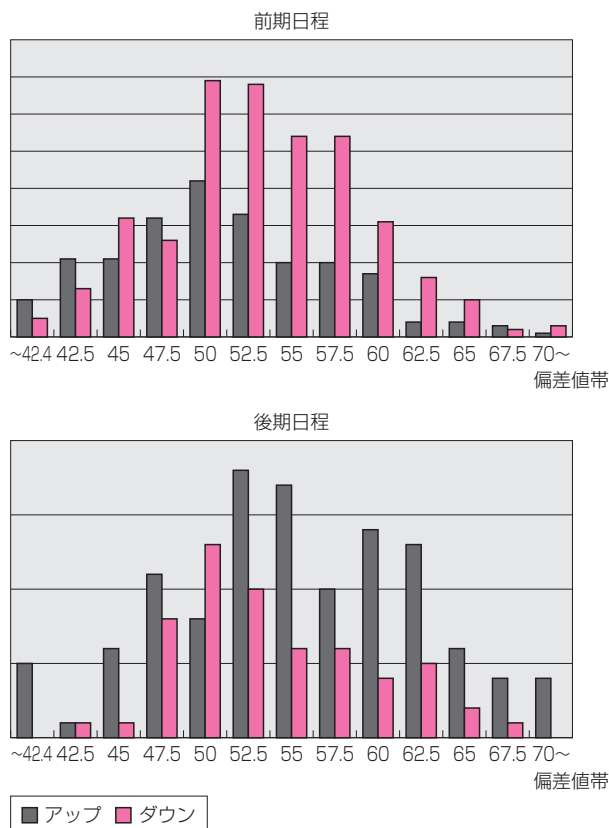
系統別の志願状況については、本誌4・5月号で各系統の詳細を分析した。ここでは改めてポイントを整理するとともに、目立った動きについて詳細を見ていく。

**表6**は前期日程の学部系統別の入試結果をまとめたものである。

最も志願者を増やしたのは「社会・国際」学系。前年比116.2%の大幅な志願者増となった。**山梨県立大(国際政策-国際コミュニケーション、人間福祉-福祉コミュニケーション)**(前年比223.0%、164.1%)、**三重大(人文-社会科学)**(同121.6%)、**下関市立大(経済-国際商)**(同134.1%)など地方大で志願者が増やしているところが目立つ。難度についても**宇都宮大(国際-国際社会)**、**京都府立大(福祉社会)**をはじめ全30学科中7学科でランクアップしている。同じく社会科学系で模試では昨年1年間通して人気だった「経済・経営・商」学系は、最終的に前年比96.8%と減少に転じた。ただし、難度の変化をみると全85学科中24学科でランクアップしており、全体的に難度は上がっているといえる。**新潟大(経済-経営)**(前年比70.8%)、**香川大(経済-経済)**(同89.7%)など志願者が減少していてもランクアップしているところが少なくない。

一方、不人気となったのは「教育」系で、「教員養成課程」「総合科学課程」ともに前年比約1割の大幅な減少となった。例年センター試験の平均点が下がると「教員養成」系に受験者が集まることが多いが、今年に関しては昨年の模試時の不人気そのまま本番入試まで続いた格好だ。難度の変化をみても、「教員養成課程」で293学科中99学科、「総合科学課程」で107学科中37学科がランクダウンしており、不人気ぶりがうかがえる。なかでも**福井大(教育地域科学-臨床教育科学)**は志願者が前年比31.3%と激減し4ランクダウン、**滋賀大(教育-環境教育(理系型))**は同57.7%で3ランクダウンとなった。

〈グラフ4〉国公立大 2次難易ランクのアップダウン状況



※集計の難度は前年度(06年度)の実態ボーダーを使用

〈表5〉2008年度より後期日程を廃止する大学(学部・学科)(判明分)

大学名	学部名	学科名
東北	教育、法、薬	全学科
	医	保健
山形	工(Bコース)	情報科学
宇都宮	農	森林科学
東京	理科三類	
新潟	教育人間科学	学校-音楽・美術、芸術-音楽表現・書表現
	歯	口腔生命福祉
静岡	教育	学校-英語、生涯-生涯学習
名古屋	文、理、農、医	全学科
三重	教育	学校-英語教育
神戸	医	医
徳島	工(夜)	全学科
	医	医、保健-検査技術科学
鳴門教育	学校教育	障害児教育
愛媛	教育	総合(国際理解教育、情報教育)、芸術-音楽文化
	医	看護
高知	医	医
九州	芸術工	全学科
福岡教育	教育	中等-社会
長崎	教育	中学-理科
首都大学東京	健康福祉	理学療法、作業療法
	都市教養	法学系
京都府立医科	医	医
大阪市立	医	看護

※河合塾調べ:5月中旬現在

〔表6〕 国公立大 学部系統別入試結果（前期日程）

	志願者数 (A)			合格者数 (B)		倍率 (A/B)	
	2006年度	2007年度	前年比	2006年度	2007年度	06年度	07年度
文・人文	27,433	27,269	99.4%	9,114	9,220	3.01	2.96
社会・国際	7,620	8,855	116.2%	2,626	2,952	2.90	3.00
法・政治	13,989	13,532	96.7%	4,527	4,419	3.09	3.06
経済・経営・商	29,799	28,847	96.8%	10,231	10,185	2.91	2.83
教育－教員養成	21,215	19,206	90.5%	7,540	7,589	2.81	2.53
教育－総合科学課程	11,680	10,364	88.7%	3,787	3,689	3.08	2.81
理	14,262	14,278	100.1%	5,667	5,652	2.52	2.53
工	58,493	60,517	103.5%	25,465	25,882	2.30	2.34
農・林・水産	17,176	16,352	95.2%	6,195	6,154	2.77	2.66
医・歯・薬・保健	40,123	38,077	94.9%	10,110	10,214	3.97	3.73
家政・生活科学	2,458	2,335	95.0%	772	766	3.18	3.05
総合・情報・環境・人間	7,668	8,276	107.9%	2,934	3,003	2.61	2.76
芸術・体育・他	5,515	5,268	95.5%	1,302	1,344	4.24	3.92

※5月22日現在河合塾集計

### 「理」「工」学系で人気回復の兆し 医療系で受験生離れ目立つ

理系に目を移すと、ここ数年不人気が続いていた「工」学系が増加に転じた。前年比89.7%の志願者減少となった建築系を除き、全ての分野で前年並みもしくは前年を上回る志願者を集めている。また、「理」学系もほぼ前年並みの志願者を集めており、理工系が人気回復の兆しを見せている。

「工」学系の難度をみると、後期日程では北海道大、東京工業大、九州大といった難関大や、滋賀県立大、大阪大、神戸大などの近畿圏の大学でランクアップが目立つ。複数大学の後期日程廃止や京都工芸繊維大の前期シフトなど後期日程の募集枠が約1割小さくなったことで激戦りとなったようだ。前期日程では、昨春入試で志願者が減少して倍率が1倍台となった学科がその揺り戻しでランクアップしているところが多かった。

近年安定した人気を保っていた「医・歯・薬・保健」学系だが、今春入試では前年比94.9%と志願者が減少した。詳細分野別に見ると、「看護」系ではほぼ前年並みと堅調に志願者を集めているが、「医」「医療技術」では前年比1割近い大幅な減少となった。昨年度から6年制化された「薬」学系も前年比92.1%と昨年に引き続き大幅な志願者減となっている。

〔表7〕はこの系統の前期日程のランクアップダウン件数である。「薬」学系、「医療技術」系でダウン件数の多さが目立った。

### 多様化する国公立大入試 大阪大など大学の統合も

最後に2008年度入試で前述したポイントのほかに判明している情報をまとめておく。

近年拡大が目立つAO入試は、2008年度も新たに導入する大学が多い。東北大では後期日程を廃止するかわりに教育・薬・医（保健）で新たにAO入試を実施する。そのほか、大阪大（理－物理）、九州大（芸術工）などでもAO入試の新規実施が判明している。国公立大でAO入試が導入された2000年度は4大学12学部での実施であったが、2007年度は53大学136学部まで拡大しており、国公立大においても無視できない入試方式となってきた。

2006年度入試から北海道大、京都大など6大学の医学科で理科3科目が必須化されていたが、2008年度もこの動きが拡大する。旭川医科大、奈良県立医科大、九州大の医学部医学科がセンター試験で理科3科目を必須とする。また、2009年度入試では徳島大で理科3科目が必須となることが予告されている。

近年相次いでいる大学の統合であるが、2008年度は大阪大と大阪外国語大が統合され（新）大阪大となる。これにともない選抜方式の変更も予定されているので、志望者は注意が必要だ。また長崎県立大と県立長崎シーボルト大から（新）長崎県立大への統合も予定されている。

既に判明している入試変更点については河合塾の入試情報サイトKei-Netにて閲覧できるので、ぜひご活用いただきたい。

〔表7〕 国公立大 「医・歯・薬・保健」学系分野別ランクアップダウン状況

分野	区分数	ボーダーランクの変化	
		アップ (%)	ダウン (%)
医	47	4 (8.5%)	4 (8.5%)
歯	12	1 (8.3%)	1 (8.3%)
薬	21	3 (14.3%)	10 (47.6%)
看護	29	3 (10.3%)	8 (27.6%)
医療技術	56	8 (14.3%)	18 (32.1%)
保健・福祉	5	0 (0.0%)	1 (20.0%)
合計	170	19 (11.2%)	42 (24.7%)

※昨今ともに実態ランクを持っている学科数で集計（新設や小論文・面接・実技等でランクを持たない学科を除く）

# 私立大学編

次に私立大の入試結果を見ていく。本誌4・5月号では、全国262大学の一般入試（一期）の志願状況を速報としてお伝えした。今号では、全国493大学について二期・3月入試を含めた一般入試の志願者・受験者・合格者数の集計がほぼ完了したので、その集計データをもとに2007年度私立大入試の特徴を総括することにする。

### 4年ぶりに志願者増加 センター試験の平均点ダウンの影響は私立大にも色濃く

まず始めに近年の私立大入試の状況を振り返っておく。私立大では18歳人口減の影響を受け、2006年度までの3年間志願者減少が続いていた。2007年度入試でも、昨秋時点では地区

格差はあるものの志願者の減少が予想された。しかし、フタを開けてみると、センター利用方式を含めた私立大一般入試全体の志願者は前年比103.6%と増加へ転じた(表8)。延べ人数では約257万5千人となり、前年を約8万9千人上回ったことになる。入試方式別に見ると、一般方式が約184万1千人(前年比101.9%)、センター利用方式で約73万4千人(前年比108.0%)と、いずれも増加している。

センター利用方式は2006年度の107.5%に引き続いて大幅に志願者を増やしている。ただし、志願者増加はセンター試験の新規利用や新たな方式導入による効果であり、既存の学部や方式では志願者は減少している。さて、志願者数が大きく増加した大学をみていくと、早稲田大(6,205人)、立教大(5,388人)、東洋大(5,115人)、法政大(4,919人)、関西大(4,173人)などとなっている(人数は対前年増加数)。いずれも都市圏の主要大であり、利用学部や新方式の追加などの大きな変更があった大学である。特に早稲田大では新規にセンター利用方式を導入した政治経済学部(2,482人)と、再編した文学部(1,819人)、文化構想学部(2,015人)で多くの志願者を集め、実質倍率10倍を越す学科もあるという大変厳しい入試となった。一方で、難関大であっても慶應義塾大、青山学院大などは前年の反動で志願者が減少しており、明暗を分ける形となっている。

さて、一般方式も志願者数が増加したわけであるが、こちらは2006年度までの減少傾向から一転、増加したことになる。これにはセンター試験の平均点ダウンが影響していると思われる。平均点ダウンによって弱気になった国公立大志望者が、国公立大への出願を諦め私立大専願に切り替える、あるいは併願する私立大の数を増やすなどし、それがセンター利用方式のみならず一般方式にも波及したと見られる。ただし、後で述べるように実際の一般方式での志願者増加大は、東京・近畿の2大都市圏を中心とした一部の大学に集中している。

次に一期・二期別の集計を見ていく(表8)。2007年度入試では二期入試の合格者数に注目したい。前年比88.5%とかなり絞り込まれている。これは一期入試の歩留まり率が例年以上に高かったことを意味する。これもセンター試験平均点ダウンの影響と考えられる。国公立大の志望を下げた受験生の中には出願した国公立大より合格した私立大を入学先として選んだ者も少なくなかったのではないかと推測される。

(表9)は地区別の志願状況である。前年比で100%を上回っているのは東京(105.6%)と近畿(108.1%)の2大都市圏のみであり、都市圏と地方の二極化はさらに拡大してい

る。なお、その他の地区の状況を一般・センターの方式別に見ると、北海道地区(93.4%・109.2%)、東北地区(90.3%・101.8%)、関東・甲信越地区(東京除く)(88.1%・97.3%)、東海地区(93.4%・112.1%)、北陸地区(84.8%・85.9%)、中・四国地区(92.9%・103.9%)、九州地区(98.3%・100.4%)となっている。関東・甲信越、北陸を除けばセンター方式は前年比100%を上回っており、各地区の志願者減の原因は一般方式での減少にあるといえる。先ほど私立大全体では一般方式でも志願者が増加したことを取り上げたが、数字を引き上げたのは都市圏の大学であり、地方では志願者減少傾向に変化がなかったことがわかる。

次に入試難度別の志願状況を見ていく。(表10)は昨年の実態ランク別に一般入試志願者の増減を集計したものである(新規学科や新規方式で昨年ランクをもたない場合は、昨秋時点の模試での予想ランクを使用)。2006年度入試では難関大の志願者が増え、それ以外の大学で減少という二極化が顕著であった。では、2007年度入試ではどうであったのか。2007年度も1ランク以上(偏差値65.0以上)の難関大では各ランク帯とも前年並みの志願者が集っており、基調としての難関大人気に変化はない。しかし、一番のボリュームゾーンは5~3ランク(偏差値55.0以上62.5未満)で、各ランク帯とも志願者は前年比110%前後と大幅に増えている。センター試験平均点ダウンの影響で、国公立大志望者が出願する私立大をこのランク帯に求めた結果と考えられる。

なお、11ランク以下(偏差値42.5未満)の大学群では志願者は前年の9割以下にとどまり、志願者離れが続いている。そのため倍率(志願者/合格者)も軒並み1倍台となっており、これらの大学群では全入に近い入試が行われているといえる。

### 入試改革・学部の再編新設効果 志願者数増加大の背景

(表11)は今春の一般入試で志願者を増やした大学と減らした大学のトップ20である(人数差順)。志願者増減の絶対数が基準となっているため、ここに挙がる大学は入試規模が大きな大学ということになる。それゆえ減少大が必ずしも二極化の一方に位置する不人気大学と一致するわけではないことをあらかじめおことわりしておきたい。

さて、志願者増加大では本誌4・5月号発行時点の集計と比較して上位12位までいくつかの順位の入替わりがあるものの、20大学の顔ぶれは変わっていない。ほとんどが東京・近

(表8) 私立大入試結果(一般・センター別/一期・二期別)

	志願者数(A)					合格者数(B)					倍率(A/B)		
	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度
全体	2,559,972	2,485,828	2,575,318	97.1%	103.6%	716,197	754,682	773,818	105.4%	102.5%	3.6	3.3	3.3
一般	1,927,772	1,806,219	1,841,147	93.7%	101.9%	514,825	525,011	523,267	102.0%	99.7%	3.7	3.4	3.5
センター	632,200	679,609	734,171	107.5%	108.0%	201,372	229,671	250,551	114.1%	109.1%	3.1	3.0	2.9
一期	2,379,011	2,320,810	2,402,215	97.6%	103.5%	665,960	704,008	728,984	105.7%	103.5%	3.6	3.3	3.3
二期	180,961	165,018	173,103	91.2%	104.9%	50,237	50,237	44,834	100.9%	88.5%	3.6	3.3	3.9

\*5月22日現在 河合塾集計(493大学判明分)

\*集計は2005~07年度の3年分について志願者数・合格者数を公表している大学を集計(合格者数の未判明やいずれかの年度データが非公表の学部・学科等については集計対象から除く) (表9)以降も同条件で作成

(表9) 私立大入試結果(地区別)

地区	志願者数(A)					合格者数(B)					倍率(A/B)		
	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度
北海道	33,406	29,421	28,955	88.1%	98.4%	16,730	16,380	15,287	97.9%	93.3%	2.0	1.8	1.9
東北	33,808	31,359	29,107	92.8%	92.8%	13,396	14,036	14,221	104.8%	101.3%	2.5	2.2	2.0
関東・甲信越(東京除く)	224,512	201,718	183,017	89.8%	90.7%	68,500	73,076	75,295	106.7%	103.0%	3.3	2.8	2.4
東京	1,314,353	1,300,790	1,373,429	99.0%	105.6%	302,572	326,139	345,040	107.8%	105.8%	4.3	4.0	4.0
東海	184,245	173,846	170,605	94.4%	93.1%	70,420	72,069	72,747	102.3%	100.9%	2.6	2.4	2.3
北陸	15,471	13,166	11,207	85.1%	85.1%	6,271	6,087	6,143	97.1%	100.9%	2.5	2.2	1.8
近畿	588,209	583,804	630,909	99.3%	108.1%	167,349	175,843	173,614	105.1%	98.7%	3.5	3.3	3.6
中・四国	57,941	49,972	47,518	86.2%	95.1%	27,499	26,169	25,950	95.2%	99.2%	2.1	1.9	1.8
九州	108,027	101,752	100,571	94.2%	98.8%	43,460	44,883	45,521	103.3%	101.4%	2.5	2.3	2.2

畿の2大都市圏の大学である。また、これらの大学の多くに入試改革または学部再編などの大学改革を行ったという共通点がある。

1位の**関西大**は政策創造学部を新設、工学部をシステム理工、環境都市工、化学生命工の3学部で再編した。さらに、入試日を1日増やしたことも重なり、志願者は前年より18,461人増加し10万人を超えた。2位の**法政大**は工学部から分離、新設されたデザイン工学部で志願者を集めた。大学全体でもセンター利用方式で志願者を集めたうえ、一般方式ではA方式で地方試験会場を拡大、さらには新たにT日程（地方試験あり）を設けるなど受験機会を広げたことが功を奏し、計18,165人の志願者増となった。ただし、合格者も前年より約4,000人多く出しており、実質倍率は前年並みとなっている。

3位の**明治大**はセンター利用方式では大きな改革がなかったため1,337人志願者を減らした。しかし一般方式に全国5会場で実施する全学部統一入試を導入、この地方試験の効果でセンター型志願者減にもかかわらず大学全体で17,925人の志願者増となり、こちらも志願者数は10万人を超えた。4位の**早稲田大**はすでに本誌4・5月号でもお伝えしたとおり、文学部

と理工学部の改組により志願者が大幅に増加した。とくに文、文化構想学部では入試日が異なり一般方式でも併願が可能だったため志願者が集り、前年の一文、二文の合計より約7,000人増となった。基幹理工、創造理工、先進理工学部は同一入試日で併願できなかったが、3学部合計の志願者は前年の理工学部より約1,500人増加した。また、新規にセンター利用方式を導入した政治経済学部、センター方式で個別試験がなくなった商学部でも志願者が集り、大学計で14,651人増となった。

ここまでの4大学はいずれも志願者増要因が複数あり、それが著しい志願者増につながった。5位以下の大学も同様の要因のほか、国公立大志願者の流入などの影響で志願者増につながったとみられる。

なお、これら20大学の中で異色の顔ぶれなのが**共立薬科大**である。昨年暮れに**慶應義塾大**との合併が発表され、急遽受験生の注目を集めた。後ほど触れるが、薬剤師養成課程6年制化後、志願者離れが止まらない薬学部であるにもかかわらず、前年比208.3%という驚異的な数字で志願者を集めた。受験生のブランド大志向の強さを象徴する出来事となった。

〔表10〕私立大入試結果（一般入試 難度別）

ランク	志願者数 (A)					合格者数 (B)					倍率 (A/B)		
	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度
M1ランク	5,008	5,430	5,515	108.4%	101.6%	472	495	467	104.9%	94.3%	10.6	11.0	11.8
Mランク	37,187	38,080	37,672	102.4%	98.9%	3,725	3,944	3,782	105.9%	95.9%	10.0	9.7	10.0
Oランク	45,296	47,613	49,169	105.1%	103.3%	5,444	5,133	5,018	94.3%	97.8%	8.3	9.3	9.8
1ランク	96,807	96,084	99,381	99.3%	103.4%	13,692	13,174	13,109	96.2%	99.5%	7.1	7.3	7.6
2ランク	85,175	91,714	86,937	107.7%	94.8%	15,960	16,891	15,335	105.8%	90.8%	5.3	5.4	5.7
3ランク	141,000	139,964	152,447	99.3%	108.9%	26,992	27,156	27,970	100.6%	103.0%	5.2	5.2	5.5
4ランク	229,177	223,788	247,004	97.6%	110.4%	44,085	44,973	48,575	102.0%	108.0%	5.2	5.0	5.1
5ランク	144,571	132,906	147,542	91.9%	111.0%	31,757	34,023	36,564	107.1%	107.5%	4.6	3.9	4.0
6ランク	184,412	173,883	178,461	94.3%	102.6%	44,422	45,427	48,058	102.3%	105.8%	4.2	3.8	3.7
7ランク	195,369	184,786	187,319	94.6%	101.4%	51,181	52,838	55,597	103.2%	105.2%	3.8	3.5	3.4
8ランク	165,060	151,309	154,027	91.7%	101.8%	44,609	47,367	49,982	106.2%	105.5%	3.7	3.2	3.1
9ランク	117,428	104,222	101,888	88.8%	97.8%	37,053	38,829	40,726	104.8%	104.9%	3.2	2.7	2.5
10ランク	86,566	82,377	81,268	95.2%	98.7%	33,491	36,776	37,864	109.8%	103.0%	2.6	2.2	2.1
11ランク	75,124	63,326	57,071	84.3%	90.1%	29,961	30,775	29,929	102.7%	97.3%	2.5	2.1	1.9
12ランク	65,131	54,252	46,890	83.3%	86.4%	30,271	30,748	28,325	101.6%	92.1%	2.2	1.8	1.7
13ランク	83,620	68,352	56,971	81.7%	83.3%	49,872	46,347	40,276	92.9%	86.9%	1.7	1.5	1.4
BF	17,490	15,547	12,874	88.9%	82.8%	14,869	14,262	10,849	95.9%	76.1%	1.2	1.1	1.2
学科試験なし	4,717	4,399	4,534	93.3%	103.1%	1,533	1,443	1,593	94.1%	110.4%	3.1	3.0	2.8

\* ランクは前年実態（前年実態のないものは昨年秋模試での予想ランクを使用） 大学計で入試結果を公表している大学は上表には含まない

㊶72.5以上 ㊷70.0～72.4 ㊸67.5～69.9 ㊹65.0～67.4 ㊺62.5～64.9 ㊻60.0～62.4 ㊼57.5～59.9 ㊽55.0～57.4

㊾52.5～54.9 ㊿50.0～52.4 ㊽47.5～49.9 ㊽45.0～47.4 ㊽42.5～44.9 ㊽40.0～42.4 ㊽37.5～39.9 ㊽37.4以下

㊽倍率が1倍近くに近く合格率50%の偏差値帯が存在しない

〔表11〕私立大 志願者数増加・減少大学（人数差）

●増加した大学

大学名	06年度	07年度	差	前年比
①関西	82,949	101,410	18,461	122.3%
②法政	72,051	90,216	18,165	125.2%
③明治	84,526	102,451	17,925	121.2%
④早稲田	110,996	125,647	14,651	113.2%
⑤近畿	52,833	63,662	10,829	120.5%
⑥立教	58,714	67,505	8,791	115.0%
⑦東洋	53,897	60,361	6,464	112.0%
⑧中央	60,822	66,396	5,574	109.2%
⑨立命館	93,546	98,761	5,215	105.6%
⑩専修	27,054	31,688	4,634	117.1%
⑪成城	16,083	20,052	3,969	124.7%
⑫関西学院	45,204	49,108	3,904	108.6%
⑬明治学院	27,648	31,070	3,422	112.4%
⑭同志社	43,011	46,315	3,304	107.7%
⑮共立薬科	2,817	5,869	3,052	208.3%
⑯名城	20,800	23,627	2,827	113.6%
⑰大阪経済	8,438	10,927	2,489	129.5%
⑱國學院	15,218	17,487	2,269	114.9%
⑲福岡	35,091	37,180	2,089	106.0%
㊽龍谷	39,041	41,122	2,081	105.3%

●減少した大学

大学名	06年度	07年度	差	前年比
①千葉工業	18,085	12,660	-5,425	70.0%
②東京農業	28,094	24,947	-3,147	88.8%
③立正	15,514	12,520	-2,994	80.7%
④日本	74,450	71,486	-2,964	96.0%
⑤大正	5,861	2,990	-2,871	51.0%
⑥文教	17,593	15,212	-2,381	86.5%
⑦青山学院	47,829	45,550	-2,279	95.2%
⑧大阪大谷	3,972	1,896	-2,076	47.7%
⑨中部	9,084	7,241	-1,843	79.7%
⑩明星	8,384	6,546	-1,838	78.1%
⑪玉川	11,144	9,370	-1,774	84.1%
⑫摂南	7,455	5,762	-1,693	77.3%
⑬金沢工業	7,548	5,870	-1,678	77.8%
⑭日本福祉	6,231	4,630	-1,601	74.3%
⑮工学院	9,695	8,172	-1,523	84.3%
⑯中京	20,905	19,408	-1,497	92.8%
⑰東京慈恵会医科	3,823	2,371	-1,452	62.0%
⑱国際医療福祉	7,919	6,480	-1,439	81.8%
㊽東海	25,268	23,862	-1,406	94.4%
㊽徳島文理	3,606	2,207	-1,399	61.2%

来年度以降もいくつかの私立大学で合併・統合の話が挙がっている。それらの大学・学部でも今回ほどではないにしても、合併・統合効果でにわかに人気が出る可能性があり、受験生の動向に注意したい。

## マイナス要因が直撃した志願者減少大、シビアな私立大入試

次に志願者が減少している大学についてみていく。今年度は私立大全体の志願者数前年比が103.6%であったこともあり、各大学の志願者減少数も小幅である。そのなかで1位となった千葉工業大は5,425名の志願者減となっている。この大学は、地区は関東・甲信越（東京除く）、入試難度は11～13ランクと今年度の志願者減少大の条件にピッタリ当てはまり、センター方式では前年の74.8%、一般方式は67.0%と、ともに志願者を大きく減らしている。なお、昨年より3,630人の志願者減となっており、2年連続大きく志願者を減らしている。

2位の東京農業大は前年入試の反動とあってよいであろう。2006年度は新規センター方式導入と人気学科の新設により志願者数増加大の1位であった。2006年度の増加数約13,000人と比較すれば減少数3,147人はかなり小さいといえる。同様に前年の反動で志願者が減少した大学としては7位青山学院大、8位大阪大谷大などが挙げられる。

3位の立正大は不人気系統の社会福祉学部のほか、経済学部などでも大きく志願者を減らしている。この大学も2006年度入試で志願者を増加させており、その反動と思われる。なお、系統不人気の影響としては、12位摂南大（薬）14位日本福祉大（社会福祉）などがこれにあたるだろう。

4位の日本大は文理学部で新規にセンター方式を導入して2,277人の志願者を集めたものの、一般方式の志願者は減少した。法、理工、生物資源科学、薬学部などでも志願者を減らした。薬学部は系統不人気によるもの、その他の学部は競合大に志願者を奪われたものと思われる。

また、17位の東京慈恵会医科大は他の減少大とは少し事情が違う。こちらは2007年度入試から前期・後期の2回募集が1回のみとなった。これにより前年の後期志願者約1,500人分がまるごと減少数として挙がることとなった。ただし、もともと前期・後期の併願者が多かったと推測され、延べ数は減少しても、志願者の頭数はそれほど変わっていないと思われる。医学科ならではの例外と考えてよいであろう。

## 社会科学系の追い風を受けた文系は志願者増 就職状況の好転で資格直結型学部・学科の多くが不人気に

〈表12〉は系統別に志願状況を集計したものである。大まかな傾向は本誌4・5月号でお伝えした内容と変化ないが、ここで再度取り上げておく。

文系各系統では「法・政治」系を筆頭に前年以上の志願者

を集めている。「社会・国際」系のみは前年比100.8%と、私立大学全体の前年比103.6%を下回るが、これは系統内の「社会福祉」で志願者が約6,600人減少している影響で、「社会」「国際法」などは社会科学系人気の追い風を受けて志願者を大きく増加させている。「社会福祉」の不人気は、就職状況が良好なことから資格志向が薄れているため、同様に「文・人文」系の「教育」、「家政・生活科学」系の「児童」、「医・歯・薬・保健」系の「医療・福祉」などの志願者が減少している。

理系では「理」学系が前年比107.3%と志願者を増やしているほか、長らく受験生離れが続いていた「工」学系でも100.0%と下げ止まった。しかしながら、これらの系統での志願者増の原動力は2大都市圏の主要大での志願者増であり、地方大では依然志願者減少が続いている。

「農・林・水産」系では96.1%と志願者が減少している。しかしこれは系統不人気というより、2006年度入試で学科新設や改組が相次いで志願者が大幅に増加した反動といえる。「医・歯・薬・保健」系も97.0%と志願者が減少しているが、系統内の動向はまちまちである。「医」学系は前年比101.7%と、以前ほど突出してはいないものの根強い人気を保っている。対して「薬」学系は90.6%と志願者減少が続いている。薬学部は2006年度入学生から薬剤師養成課程が6年制になったことより人気急落した。薬学部の倍率（志願者／合格者）は2005年度から6.0倍→3.5倍→3.1倍と、いまだ下げ止まらない状況である。なお、資格志向が薄れたために、前述の「保健福祉」のほか、「医療技術」でも志願者が減少しているが、「看護」系のみは学部・学科新設に後押しされて115.2%と志願者を増加させている。

2007年度は、国立大志願者がセンター試験平均点ダウンのため私立大に流入して、一時的に私立大志願者が増加した。しかし、18歳受験人口自体は今後も減少していくため、私立大志願者の減少基調に変化はないものと思われる。また、受験生の難関大・都市圏大志向も根強く、それ以外の大学との二極化もいまだに拡大を続けている。多くの私立大にとっては危機的な状況のなか、入試改革・大学改革に積極的に取り組む大学のいくつかで志願者増加に成功している。一方で、こうした改革に出遅れた大学では短期間に志願者が大きく減少する現象が起こっている。私立大にとって息つく間のない厳しい時代が到来したといえる。

2008年度も数多くの大学・学部の新設が予定されている。また、現在判明分はまだ一部ではあるものの、入試方式等の変更もあまたありそうである。大学全入といわれる時代に入試方式等が変化する中、各大学の動きを見極めることの重要性が増しているといえる。本誌では今年度も先生方に最新の入試動向分析をお伝えしていく。

〈表12〉私立大 系統別入試結果

系統	志願者数 (A)					合格者数 (B)					倍率 (A/B)		
	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度	06/05	07/06	05年度	06年度	07年度
文・人文	503,140	499,504	521,465	99.3%	104.4%	144,166	152,801	158,939	106.0%	104.0%	3.5	3.3	3.3
社会・国際	249,580	240,806	242,733	96.5%	100.8%	66,384	69,826	70,117	105.2%	100.4%	3.8	3.4	3.5
法・政治	235,927	222,323	255,098	94.2%	114.7%	64,700	67,104	68,678	103.7%	102.3%	3.6	3.3	3.7
経済・経営・商	528,223	538,046	569,362	101.9%	105.8%	141,206	142,739	143,618	101.1%	100.6%	3.7	3.8	4.0
理	88,699	86,565	92,886	97.6%	107.3%	33,200	35,417	38,133	106.7%	107.7%	2.7	2.4	2.4
工	378,281	342,348	342,286	90.5%	100.0%	137,476	142,034	142,560	103.3%	100.4%	2.8	2.4	2.4
農・林・水産	61,602	71,119	68,330	115.5%	96.1%	15,228	19,353	21,463	127.1%	110.9%	4.0	3.7	3.2
医・歯・薬・保健	262,358	235,544	228,387	89.8%	97.0%	42,130	49,189	53,018	116.8%	107.8%	6.2	4.8	4.3
家政・生活科学	66,317	67,195	66,828	101.3%	99.5%	19,005	21,238	21,916	111.7%	103.2%	3.5	3.2	3.0
総合・情報・環境・人間	100,011	99,606	104,530	99.6%	104.9%	31,262	32,595	31,413	104.3%	96.4%	3.2	3.1	3.3
芸術・体育	85,347	82,398	83,065	96.5%	100.8%	20,977	22,023	23,622	105.0%	107.3%	4.1	3.7	3.5

※大学計で入試結果を公表している大学は上表には含まない